

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/08/27 ～2018/09/01)

1. 勉学の状況

授業開始から1週間が経ち、2018秋セメスターに履修中の一通りの授業を受け終わりました。1週間に二回授業がある科目が2つ(75分/100分)、残りの3つは週一回(各160分)となっており、どれも進みが早く課題も毎回課されます。例えば映画分析についてまなぶ Intro to Screen Study という授業では、指定された映画1本を視聴し気づいたことについてノートを取っていくこと、教科書は30～50ページ分 + PDFで配られる補助資料5～10ページ分のリーディングが授業一回分の課題です。これが週二コマあり間は1日なのでタイムマネジメントが非常に重要になりそうです。授業では、課題で視聴し、読んだものをもとに教室全体で議論する時間が取られます。また、週一回の撮影や編集などの実習の授業では、これからプロジェクトが課されていく予定になっており、年末の長期休み(およそ1ヶ月間)まではあっという間に過ぎてしまいそうです。上記で紹介した Screen Study の授業以外が一番多いものでも20人までの少人数授業で全員に十分な発言機会が設けられており、受動的に授業を受ける余地はありません。もともとディスカッションやプロジェクトワークが授業の中心であることが The New School の特徴だと認識していたが、早速肌で実感しております。

Fall 2018

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
9:00 Intro to Editing[3] 9:00-11:40 (160) CRN 7246 Arnhold Hall 55 W13th 804 Keith Sanborn	Intro to Screen Studies[3] 10:15-11:30 (75) CRN 1992 Johnson/Kaplan 66West 12th 407 Noah Isenberg		Intro to Screen Studies[3] 10:15-11:30 (75) CRN 1992 Johnson/Kaplan 66West 12th 407 Noah Isenberg	Intro to Cinematography [3] 9:00-11:40 (160) CRN 4572 Arnhold Hall 55 W13th 821 Justin Schein
11:30				
11:40				
12:10				
13:50 Art, Activism & Revolution[4] 13:50-15:30 (100) CRN 7454 6 East 16 St 902 Yates McKee		Art, Activism & Revolution[4] 13:50-15:30 (100) CRN 7454 6 East 16 St 902 Yates McKee		
15:30				
15:50 Media Toolkit[3] 15:50-18:30 (160) CRN 1564 Arnhold Hall 55 W13th 803 Michele Beck				
18:30				

どの授業も、千葉大学では学ぶことのできない、また The New School だから学ぶことのできる科目であり、どの教授も非常に魅力的でこれからの授業が楽しみです。ただし一言付け加えるのであれば、(私立の大学だからなのかわかりませんが)教科書が一冊100ドル以上するものを用意するように求められたり、実習のために機材を揃える必要があったりするため、出費がかさみます。

(↑時間割は自分で作成したもの)

2. 生活の状況

日によっては非常に暑い日もありますが、比較的涼しい日々が続いております。時折突然の雨が降るため折り畳み傘は常に持ち歩くようにしています。

ニューヨークシティを訪れるのは4度目で、ある程度の地理感覚や日本のものや食事などが手に入る店のありかなどは把握していたため、生活に必要なものを揃えることは思いの外容易でした。またこちらに日本国籍の知り合いが2人ほどおり、大きな寝具などの買い物は手伝っていただきました。派遣留学では運転ができませんが(そもそも免許も持っていませんが)ニューヨークは公共交通機関が充実しているためマンハッタン島を出る必要がある時以外は全く困りません。

住居は大学の寮を申請していましたが、私は主要施設がある場所から徒歩 18 分のところにある寮で、寝室は一人一部屋・1つのキッチンと2つのバスルームを12人で共有という大きなスイートに割り当てられました。寝室はマンハッタンの中心部にしては思いの外大きく快適です。洗濯は寮のビル内にコインランドリーがあり、週末は多くの学生で取り合いになります。寮のスタッフが配達の受け取りもしてもらえるため、Amazon に本などを発注することもでき、課題や研究が捗りそうです。食事は、学内施設のカフェテリアをメインに考えていましたが、思いの外価格帯が高く、昼食については歩ける範囲にある安くお腹にたまるものを開拓しています。朝食は作りたてのベーグルを、夕食は暖かい惣菜をそれぞれスーパーで買うのが手頃で、習慣化しつつあります。



3. その他（留学生の実態について）

The New School は、以下の主要 5 部門から成り立っています。

- Parsons School of Design [通称 PARSONS] (デザイン)
- Eugene Lang College of Liberal Arts [通称 LANG] (リベラルアーツ) <私はココに所属>
- College of Performing Arts [通称 CoPA] (Music / Jazz / Drama の3つ)
- The New School for Social Research (社会科学の大学院：これが母体になった)
- The School of Public Engagement at The New School (社会人や編入学生などが所属する)

基本的には上記の部門ごとに教育プログラムが提供されていますが、International Students の管理は、The New School 全体で統括しております。以下に、International Students についてわかったことをまとめて共有したいと思います。

(※ International Students の定義：米国以外から4年制に入学してきた学生＋交換留学生)

【International Students ガイダンス でわかったこと】

- The New School 全体に現在所属している International Students : 3658 人
- 今年新しくきた International Students : およそ 1000 人 (会場の座席数から憶測)
- うち、交換留学生 : 30 人 (うち、秋セメスター (8-12 月) のみの人 : 25 人)
- International Students のうち4年制に「入学」した人 : $1000 - 30 = 970$ 人程度

【Exchange Students (30 人) ミートアップ でわかったこと】

- 30 人中 27 人は (見た感じでは) 女性
- 男性は (見た感じでは) 3 人 (私+シンガポールからの学生 2 人)
- 日本からの exchange は 2 人 (私+上智大学国際教養学部 of 2 年生)

International Students のうち「入学」してきた学生の 1/3～半分近くは中国をはじめとするアジア系の学生のように見えました。一方で exchange の学生 30 人は、協定校の関係なのかヨーロッパや北米からの学生が大半を占めていたのも印象的でした。またジェンダー比については、そもそも The New School の所属学生の 7 割が女性であるという統計があるため、デザインやアートというディビジョンがジェンダー比に関係していると仮定すれば、留学生についてもこのような比率であることはある種「自然」なことなのかもしれません。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018 /09/02 ～2018/10/01)

1. 勉学の状況

秋セメスターの始まりから1ヶ月が経ち、学校生活にはだいぶ慣れてきました。ほとんど全ての授業において、Canvas というコミュニケーションツール（千葉大の Moodle と同等で、学校のポータルとは別）で必要な予習が提示され、リーディングや映画の鑑賞・分析等を行った上で授業に臨みます。課題も Canvas を通して提出する授業が多いですが、先生によってはメールでの提出や、紙での提出を指定することもあり、一元化はされていないようです。

先月の報告書で紹介した、映画分析を中心に行う Intro to Screen Study の授業では、1930 年代から 2000 年代までの色々な映画を取り扱うため、ほとんど毎晩のように色々な映画を鑑賞しています。授業で扱う映画については無償で見られるようにしてもらえるので、コストはかかりません。ただし作品の言語は英語に限らないため、フランス語やイタリア語、中国語などの映画は英語字幕を必死に追う必要があり、映像に集中するために何度も見直すこともあります。

今月は、映画の撮影を学ぶ Intro to Cinematography の授業について報告します。この授業では撮影の技術について学ぶために、実践的な撮影のプロジェクトの課題が出されます。The New School の Equipment Center ではあらゆる機材を無料で借りることができます。映像撮影用の三脚は、脚を最長にすると2メートル以上の高さになる巨大なもので、背負って歩き回るだけで疲れてしまいます。また、撮りたい画を撮るために待機することもあり、撮影は体力勝負だなと実感しています。

直近で行なったプロジェクトは、「屋外で撮影した10ショットでニューヨークを表現せよ」というものでした。

金曜日の授業で課題が出たあと、その足でロケハンをしてまわり、夜ストーリーボード（絵コンテ：下図）を描き、ロケスケジュールを立てて、翌朝から撮影。帰宅後すぐに編集し、構成を再考。

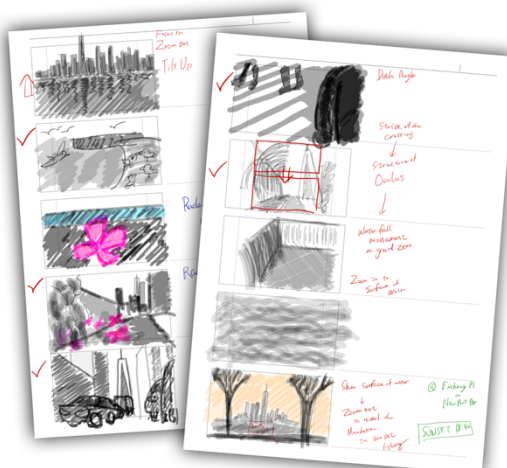
この過程でストーリーボードは何度も書き直すため、私は iPad で描いています。再び構成が完成したら、撮りきれていないショットや満足できなかったショットを撮り直すため日曜も朝から西の対岸ニュージャージーへ渡り撮影

をしました。夕方からは東の対岸、ブルックリンで日没を待ち続けていました（右上図）。



(Brooklyn より Manhattan を望む)

STORYBOARD



FINAL SHOTS



機材は予約制で数に限りがあるため、借りられる期間は限られています。そのため必然的に制作期間に制限が設けられてしまうのです。このような形で毎回課題が課せられるため、外でのロケが必要な場合、土日はほとんど撮影に当てることになります。

このように映画の鑑賞や、撮影など、それぞれの課題にはまとまった時間が必要だったり、天候や太陽の位置、機材の借りられる期間など時間帯に制約があったりするため、課題中心で生活が回っています。今回は紹介していませんが、編集について学ぶ Intro to Editing の授業でも、たまに必要な素材映像を撮影することがあります。Intro to Editing の授業では隔週で課題が出て、課題として学生が編集した作品をまる一コマ（160 分）かけて全員で批評・議論します。この授業についてはまたの機会に報告します。

2. 生活の状況

9 月には、日中高温になり夜は冷え込む「インディアンサマー」が 1 週間ほど続きましたが、そのあとはすっかり秋の気温になってきています。知人に日本から冬物を持ってきてもらったり、こちらのユニクロで暖かい服を購入したりと冬に向けた準備を始めているところです。

今回は食事、とくに日本食について報告します。大学のカフェテリアは割高で、あまりメニューのバリエーションは豊かではありません。The New School の場合、授業に応じて数ブロック離れているビルに移動することもあるので、スケジュールによっては移動途中で購入して次の授業のあるビルのラウンジで食べることも多々あります。私が週 3 で授業を受ける建物のあるブロックには日本のグロッサリーがあり、小さな店舗ながらもおにぎりに加え、コロネやソーセージロール、クリームパン、メロンパンなど「日本風のパン」から、電子レンジで温めて食べることのできる牛丼などが手頃な価格で手に入るためよく利用しています。日用品やカップ麺、生魚や米などもあり充実しています。ちなみに、電車とバスなどを使って 1 時間ほどかけてニュージャージーの方へ渡ると、かなり大きな日系スーパーがあり、ほとんど日本のスーパーと同じような買い物ができます。値段としてはざっと 1.5～2 倍です。

たまに日本食が食べたいとなると、一風堂が出店している黒帯のラーメンや、松のやのかつ定食などを食べに行きます。ただ、出店しているのはミッドタウンなため、寮からは 30 分ほど歩くか地下鉄に乗る必要があります。価格は例えばラーメン一杯で 10 ドル超えプラスチップと決して安くはなく、気軽に行けるとは言えません。それでもこちらにきて 1 ヶ月たって実感することは、洋食か和食に関わらず結局食べ慣れたものばかり口にしたいということです。



日系スーパー ミツワ@New Jersey



松のや ランチメニュー



黒帯 by 一風堂NY

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018 /10/02 ～2018/10/31)

1. 勉学の状況

この報告書を書くたびに、あっという間に時間が過ぎ去って行っていることに気づかされます。8月末に始まり12月中旬に終わる The New School の秋セメスターは10月末の現在、既に半分以上が終わりました。そのため10月はセメスターの中間試験でこれまで以上に速く過ぎて行ったように感じます。私の履修している授業においては、中間と最終試験がある授業、毎週のプロジェクトワークがそれぞれ同等に評価される授業、毎週の課題の他に少し比重の重い最終課題が課される授業、と3パターンほどあります。中間試験があったのは Art, Activism & Revolution という社会学系の授業と、Introduction to Screen Studies という映画分析の授業でした。中間試験といってもどちらも Take Home Mid-Term Exam と呼ばれるもので、授業中に時間内に書き上げなさいといういわゆる「試験」ではなく、日本の大学のコンテキストに合わせて表現すれば「レポート」に近いものになります。今回はその2つの課題がどのようなものだったかを報告したいと思います。

Art, Activism & Revolution という授業では、アメリカ独立からフランス革命、奴隷制廃止運動から現在の#metoo にいたるまでの広義のアクティヴィズムのなかで、アートがどのような役割を果たしたか、どのように解釈されどのように利用されたかを歴史を辿りながら俯瞰していきます。様々な思想や理論を読みながらそれぞれの解釈を議論していくコマ100分授業が週に二回の授業があり、毎回課されるリーディングは量的にも難易度的にも負荷の大きいものになっています。想像していたよりも歴史的な観点からの資料を多く取り扱い、授業前までに読む資料が授業の前日に提示されたりすることもあるため毎週正直かなり辛いですが、分析の観点としては自分自身が千葉大での研究で行っている表象分析に非常に近しいため、とても有意義で感心にあった授業を選択できたなと考えています。今回の Mid-Term Exam では、3問の問いが出され、それぞれの問いについて指定された論文や歴史資料の全てから1箇所以上の引用をして500語以上で論述せよというものでした。3つの問いの概要としてはそれぞれ、Q1.アメリカ社会において植民地主義が現在に至るまでどのように反映され続けてきたか、Q2.フランス革命期における2つのビジュアル(図1)はgenderやraceの観点でどのように分析できるか、Q3.奴隷制廃止運動において使われた二つのビジュアル(図2)はどのような点で白人の優位性を再生産する効果をもたらしているか、というものでした。



映画分析の基礎を学ぶ **Intro to Screen Studies** の授業では、8月の報告書でも少し紹介したように毎回1-2本の映画を事前に視聴し自分なりに解釈した上で授業に臨み、授業においては教授がピックアップした特に分析医の対象とすべきシーンを再度見ながら、議論をします。セメスター中に何度か課される2ページほどの小さなライティング課題は、取り上げた映画のうち授業内で議論しなかった部分から、2分以内のシーンを選んで分析する課題になっています。それに対し Mid-Term Exam では、取り扱った映画の中から一つを選んで作品全体を通した分析をすることが求められ、私は Spike Lee の **"Do the Right Thing" (1989)** を選びました。この作品では、もともとイタリア系アメリカ人が多く住んでいたニューヨーク・ブルックリンが舞台で、ほとんどの住人がアフリカンアメリカンになり、あたらしくラテン系やアジア系も徐々に移住し始めてきた時期を描いており、イタリア系アメリカ人の経営するピザ店を中心に近所で起こる様々なトラブルを経て、最終的にはピザ店に火がつけられ破壊されるという暴動に至る物語が描かれます(図3)。描かれる一つ一つの衝突は、単純な「白人」対「黒人」という構図では決してなく、そういった race に関係なく起こりうるトラブルであり、また登場人物のうちごく一部を除いてほとんどは「人種差別主義者」ではないにも関わらず、小さないざこざの際に個人がどのように自分自身を identify するか、どのように自分や相手をラベルづけ(ラベリング)するかによってだんだんと「人種」対立の形になっていってしまう様子が巧妙に描かれています。この点に着目し、私はスクリプトの中から、「race」に関係すると思われるラベリングをしている台詞を抜き出し、それらが誰によって誰に対して行われているかを整理(図4)した上で、特に重要と思われるシーンにおけるシーンのショット構成や照明、小物、フレームの中における立ち位置などの観点から分析しました。その分析をもとに、個人によるラベルづけやグループ化が人種本質主義に陥り、それがさらなるラベルづけや本質化を引き起こしていく過程がどのように表現されているかを明らかにしました。

図3



図4 ラベリング分析の表(一部)

Nigger		
Speaker	Listener	
1 Pino	Mookie	How come niggers are so stupid?
2 Mookie	Pino	If you see a nigger, kick his ass.
3,4,5 Mookie	Pino	Pino, all you ever talk about is nigger this and people are so-called niggers.
6 Pino	Mookie	It's different. Magic. Eddie. Princes are not niggers.
7 Pino	Sal	I'm sick of niggers. It's like I come to work, I don't like being around them. They're animals.
8 Pino	Sal	We should stay in our own neighborhood, stay in. Should stay in theirs.
9 Sal	Radio & Buggin	You black cocksucker! I'll fucking tear your ass!
10, 11 Black people	Sal	Oh, we're niggers now? We niggers now!
12 Sal	Radio & Buggin	You black cocksucker! You nigger motherfucker!
13 Police Officer	Buggin Out	Shut up, you little nigger fucker!
14 Pino	Himself	Fucking niggers.
White		
Speaker	Listener	
1 Buggin Out	Mookie	Yo, hey, what's up with the white boy?
2 Buggin Out	White Man	Not only just knocked me down, you stepped on my brand new, white Air Jordans.
3 Buggin Out	Himself	Damn! Look at this. Get this thins straightened. White guy, black man. I can't believe this crap.
4 Da Mayor	Mother Sister	He reared back, come down off that mound, up a black man's ass. I, Maybe I ought to be a hero more often, huh?
5 Pino	Vito	Good, Vito, black, white. No. No, no, no. No.
6 Buggin Out	Sal	You fucking white trash!
7-11 Sonny	Everyone	I no white!
Italian		
Speaker	Listener	
11 Pino	Mookie	Radio!

2. 生活の状況

10 月の半ばくらいか摂氏一桁の気温が標準になってきて、寮のセントラルヒーティングがようやく起動し始めました。それまでは、たまにかなり冷え込む夜があっても、ヒーティングが入らず部屋の中でも着込んでいた時期がありましたが、起動するようになってからはかえって暑すぎて困るときもあります。セントラルヒーティングの建物で生活するのは初めてなので、自分でヒーティングがコントロールできないといかに大変か思い知らされます。ちなみに火災予防の観点から個別の部屋に自前のヒーター持ち込みは禁止されています。

また寒くなってから気づいたことは、千葉で生活しているときに当たり前のように購入するペットボトルや缶入りの温かい飲み物が手に入らないのが意外と不便だったということです。自動販売機自体があまりないことは認識していましたが、温かい飲み物が自動販売機で手に入る環境の利便性に気づかされました。代わりに、徒歩 5 分以内に必ず 1 件はあると言って良いほどたくさんあるスターバックスで温かい飲み物を買うことになります。そんなとき、「アメリカの生活に慣れてきたな」と感じる瞬間が訪れます。

これは自分の経験的な観察にすぎませんが、こちらの「お得」の概念は「同じものが安くなる」のではなく、「値段が同じかちょっと足すだけで量が増える」という場合が多いように感じます。スターバックスのカップのサイズは日本もアメリカも共通ですが、同じ商品でも各サイズの値段や、サイズごとの値段の差の付け方は異なります。単純なのでアイ스티ーを例にすると、**図 5** の表のようになります。

図 5 スターバックス アイ스티ー 日米価格比較表

	容量	日本 価格	US 価格(レト:\$1=¥113)
Short	240ml	¥290	
Tall	350ml	¥330	\$1.75 (¥197.75)
Grand	470ml	¥370	\$2.25 (¥254.25)
Venti	590ml	¥410	\$2.65 (¥299.45)
Trenta	916ml		\$2.95 (¥333.35)

まず日本ではショートサイズが最小ですが、このサイズは日本限定のもののように、アメリカでは逆にヴェンティより大きいトレンタがあります。そのためトルではなくグランデが標準サイズとなっています。価格差は日本では

均一に四十円ずつの差になっていますが、アメリカの店舗の場合は大きくなればなるほど価格差は小さくなっていきます。もちろん水筒に入れて持ち歩けばいいといってしまうえば話は早いのですが、それでもやはり温かいものが欲しい時や逆に室内が暑すぎて冷たいものが欲しい時には店舗で購入することになるわけで、そうするとあと 40 セント足して 120ml ふえるならヴェンティサイズにしてしまおうか、などと考えるようになります。これが、私がアメリカの生活に慣れてきたなと感じる瞬間です。

ちなみにアイ스티ーをスターバックスで買う理由は、ボトルで手に入るものはほとんどフレーバーがつけられている、あるいはかなり砂糖が入っているということが関係しています。

気温もだいぶ低くなってきましたが、日も短くなってきており、11 月 4 日にはいよいよサマータイムが終わります。3 月にはまたサマータイムが始まるので、サマータイムの期間の方がむしろ長いわけなのですが、一時間消える・増えるというのを体験するのもおもしろいと感じます。一時間消える日は寝不足にならないように注意しようと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018 /11/01～2018/11/30)

1. 勉学の状況

8 月末に始まった The New School の秋セメスターはあと三週間もしないうちに終わろうとしています。各授業とも最終プロジェクトやペーパーの課題が課され始めていて 12 月の前半はまたかなり忙しくなりそうです。

今回は、まだ一度も紹介したことのない **Media Toolkit** と **Intro to Editing** という授業についてレポートします。

Media Toolkit では、主に Adobe Photoshop, Premiere, Audition といった画像編集や映像編集、オーディオ編集のソフトウェアの使い方について学びます。使い方だけを学びいわゆる「How to」メインのハンズオン講座のようなものかと思っていたら、最初の方の授業では、複製技術がもたらしたポジティブ・ネガティブ両側面の影響について文献を読んで議論したり、コラージュ作品がいかにして政治的メッセージを発信することに寄与したかなどについて学んだりするところから始まりました。画像編集や映像編集を単にツールとして学ぶだけではなく、このようにそういった編集という操作がいかにか恣意的で、それがどのような影響を及ぼすかについても学び議論することを学期の前半に行うのです。私が経験した一つの授業の経験だけで、日本とアメリカの比較というように一般化するわけではありませんが、「Media Literacy」といった言葉の捉え方が日本で考えられているものとだいぶ異なるな、と気づかされました。

基本的なソフトの使い方を学んだ後は、授業中の指定時間内で「ウェブにある素材から何らかのメッセージを伝えるコラージュを作りなさい」といった課題や、ペアを指定されて「インタビュー動画を撮影し編集しなさい」といった課題(図1)が出ることもありました。1 コマ 160 分のため授業中に様々なアクティビティができるのは良い点だと思います。授業外の課題も毎回課されます。11 月の前半は音響についてフォーカスした課題が何度か出ており、部屋の中にあるもので録音した音を編集してウェブ上にある特定の映像に合わせて効果音を再現しなさいという課題や、オーディオを取り除かれた映像が配られて、自分の解釈でそれに音をつけなさいという課題もありました。このように各学生が授業外で作ってきた作品は、次の授業の冒頭で全て上映し互いに批評し合います。これも 1 コマが長くなくてはできないことです。

Intro to Editing は、映像編集だけに特化した授業です。編集における基本的なルールから、様々な形式の編集について学びます。この授業では、隔週で課題が出されるため、奇数回目の授業では講義とハンズオン、偶数回目は前週の授業で出された課題の映像を全員分上映して、160 分をまるまる使ってそれぞれ学生同士で批評し合うといったスタイルになっております。1 セメスターに 15 回ある授業の半分は学生の課題作品の上映・批評に使われることからどれほどそこに重点が置かれているかがわかります。古典ハリウッドからのコンティニューイティ編集(自然

図1 **Media Toolkit** の授業中に課された課題

コラージュの課題

インタビューの課題



につながっているように見える編集)や、ソヴィエトで発達した関係ない動画を並べることで意味合いを作り出すモンタージュ手法、さらには YouTube 動画風の編集まで色々な種類の編集を学びました。また、隔週で課される課題とは別に、前の人が作った動画の最後の 1 秒だけが渡され、次の人はそれをもとにインスピレーションを得て次の一分間の動画を作っていくという編集リレーの課題が同時に進行しており、その最終形は最終週の授業で上映されるようなのでどのようなものに仕上がっているか楽しみです。

2. 生活の状況

11 月に入って急激に平均気温が下がり、最高気温が氷点下の日も珍しくなくなりました。積雪は 11 月中旬に一度あったきりですが、Thanksgiving も経ていよいよ本格的な冬に突入したことを実感しています。

11 月末には入居している寮のランドリールームから出火し、140 人近くの入居者が深夜 1 時過ぎに外へ避難するという騒動もあり、いつ何が起ころかわからないことを実感しております。幸いけが人もなく、ランドリールームの洗濯機が焦げただけで済みましたが、消防が帰ったあと、翌朝今度は乾燥機の一台から再び火が出てまた避難という事態になり、1 日に 2 度も火災が起きました。

話題を一転させて今月は、**ミュージカル**と**映画**、**Thanksgiving** についてレポートします。

まずは**ミュージカル**。私が初めてニューヨークを訪れた AIG 高校生外交官のプログラムの際には、日程の中に「The Lion King」の鑑賞が日程として含まれており、本場のミュージカルを体験したのはそれが初めてでした。その後、個人的な旅行としてニューヨークを訪れた際には必ず何かしら鑑賞しており、訪れるたびに新しい演目を見ることができていました。そして今回の留

図2 初雪 @寮のパティオ (11/15)

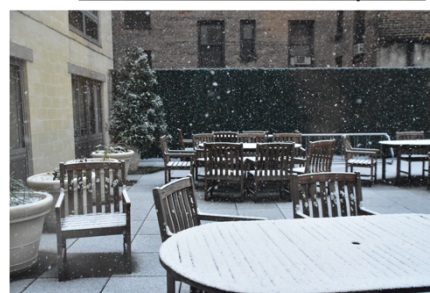
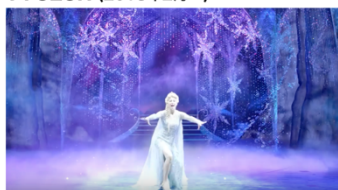


図3 ブロードウェイ・ミュージカル
2018年新演目
Frozen (2018年2月～)



Mean Girls (2018年4月～)



King Kong (2018年10月～)



学においても、授業と課題の合間を縫って、平日の夜の時間などにミュージカルの鑑賞に行っております。シアターディストリクトまでは寮から電車で 10 分。

旅行で訪れる際は、限られた日程の中で座席を探そうとするためどうしても高額になってしまいがちですが、長期間この地にいると安くて良い席を手に入れることができるようになります。例えば、抽選で通常の半額以下でそこそこの席を手に入れられる Lottery にエントリーし続けたり、閑散期の平日の公演においては、演目によって安売りチケットが突然発売されたりもします。ブロードウェイの多くの公演では公式サイトにおいて一般人によるチケットの転売が公式に認められており、祝日や年末年始などのチケットは定価の 2～4 倍にまで釣り上がることも珍しくありません。私は平日の安売りチケットなどを利用して、2018 年の新演目(図3(画像は公式のプロモーション動画よりキャプチャ))をいろいろと見にいきました。中でも分析対象にしている「Frozen」には何度も足を運んでいます。

昨今のブロードウェイにおける新演目の特徴の一つとして、映像をフルに活用していることが挙げられます。例えば、2004 年の学園コメディ映画をそのままのタイトルでミュージカルにした「Mean Girls」(2018 年 4 月～) では、半円のステージの背景全面が可動式の LED 画面になっており、演者はどこからでも入場可能で、場面転換も一瞬でできるようになっています。

1933 年の映画の展開をベースにしつつも、2018 年の社会コンテキストに合わせて設定を大幅に変えて、戦間期に女優を目指していたアフリカンアメリカンの女性を主人公にしたストーリーで展開される「King Kong」(2018 年 10 月～) も、全面画面を背景に活用しています。もちろんこの作品の最大の見せ場は、実寸大のキングコングの巨大装置がまるで生きているかのように動く演出なのですが、背景の映像があることによってその迫力がさらに増します。エンパイアステートに登るシーンは、まさに映画さながらの迫力です。

上記二つの演目が映像を全面に押し出しているのに対して、「Frozen」ではあくまで従来の形式を大事にしながら、あまり映像に頼りすぎず、どうしても映像でないとできない部分(エルサの魔法など)だけ選んで使っているのが特徴的です。映像も上記二作とは違い、画面ではなくプロジェクターでの投影にすることによって他の装置のなかに自然に溶け込んでいます。このように演目によって演出の趣が大きく異なったり、その演出に合うシアターが選ばれていたりするのも、シアターが立ち並ぶブロードウェイならではの特徴です。

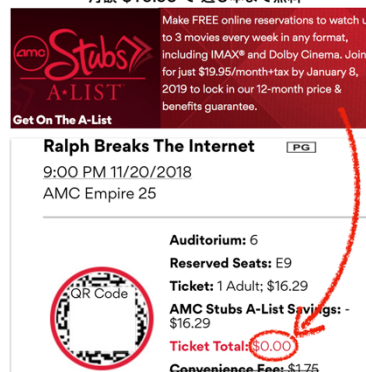
続いて映画についてです。映画を学びに来ている私にとって、映画をたくさん見るのは学びの一環であり当然のことなのですが、こちらに来て驚くことは、映画が日本よりももっと身近だということです。映画分析を学んでいない学生でも、映画をかなりの頻度で見に行ったり、映画分析で行うような議論を日常的な会話の中でしていたりもするのです。それを可能にしているのは、日本と異なる映画鑑賞の環境・ビジネス形態です。

例えば MoviePass というサービスでは月額 \$9.95 で 1 日 1 本映画館(どの映画館でも可)での映画が見放題になります。AMC (日本でいう TOHO のような立ち位置) の映画館では、月額 \$19.95 で週に 3 本まで無料で鑑賞できるといったサービスを展開しています。AMC の方が本数は少ないのですが、MoviePass では同じ映画は一回まで、音響や画像がより高品質の IMAX や Dolby を選択することができないという制限があります。私の場合同じ映画を何度も見に行くことや、近くに AMC の映画館が多いこと、毎日は映画館に行かない等の理由から AMC の会員になっています。

図4 ブロードウェイ・ミュージカル 2018年新演目の劇場



図5 AMC Stubs A-LIST 月額 \$19.95 で 週3本まで無料



最後に **Thanksgiving** についてです。11 月の第四木曜日 Thanksgiving の前後は土日と連続で 5 日間の連休になりました。同じ寮に住んでいる学生もほとんどが地元に戻り、閑散としていました。今年の Thanksgiving の当日 (11/22) は、最低気温が-8℃、最高気温が-2℃という今月でもっとも寒い日だったことや、ターキーがパサパサしていてあまり好きではないという理由から、私は家からは一歩も出ずターキーも食べませんでした。

しかし毎年 Thanksgiving の週には多くの映画が公開されます。今年は Walt Disney Animation Studios からは『Ralph Breaks the Internet (邦題：シュガー・ラッシュ・オンライン)』が公開されました。私は公開日の前夜に行われる初回公演のチケットをとり、鑑賞に行き翌日から学校が休みの期間に分析記事を書いていました。

日本では吹き替えや字幕をつける作業の関係や、11 月に大型連休がないことなどから、アメリカで Thanksgiving に公開された映画の上映が始まるのは早くても 1 ヶ月後の 12 月。3 月の春休みに合わせて公開ということも少なくありません。

そのため、Thanksgiving に公開される映画を最速で鑑賞して、分析するということをできるだけ私にとっては十分に「Thanksgiving らしい」過ごし方ができたなと満足しています。週に 3 回も劇場で鑑賞できるというのも幸せな限りです。

図 6 Ralph Breaks the Internet
邦題『シュガー・ラッシュ・オンライン』



その際に書いた分析記事はウェブで公開しています。本作を、ディズニーの「プリンセスストーリー」の文脈に位置付けた時にどのようにプリンセス像や物語の展開をアップデートしているかを分析・考察しており、終盤までの展開の説明もしておりますので、ご鑑賞される予定のある方は鑑賞後にお読みください。

<https://ikyosuke.hatenablog.com/entry/2018/11/23/151154>

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018 /12/01～2019/1/4)

1. 勉学の状況

12月17日に秋セメスターのすべての授業が終わり、この派遣留学の半分か過ぎ去りました。体感としてはあっという間で、まだまだここで学びたいのにもう半分終わってしまったか、と感じております。

年が明けて成績が出ましたが、単位はすべて修得でき、成績も全科目最高評価のAで、一安心しております。誰もが慣れ親しんでいる英語とはいえ、母国語でない言語環境で講義を聞き、議論をし、ペーパーを書き、共同作業で撮影・編集・製作も行う授業で、自分自身の取り組みが評価してもらえることは自信につながるものだなと実感しております。後半の春セメスターの授業も全力で取り組んでいこうという意気込みを持てる結果となりました。

今回は、春セメスターの履修について報告したいと思います。The New School では、春セメスターの授業の履修登録の開始が、11月5日から始まるということになっていたのですが、私は当日になっても履修画面にログインできず、留学生担当に問い合わせると、留学生は履修登録の開始が遅いとのこと。それも11月16日から履修登録ができるとのことでした。The New School の授業の特徴は、ほぼすべてのクラスが10～15人の少人数制であることで、それはつまり人気な授業はすぐに席が埋まってしまうということです。私が履修を予定していた授業は、こちらでフィルムを学んでいる学生なら多くの人が取りたいと思う「Directing（監督）」や「Screenwriting（脚本）」であったため、これでは取れなくなってしまうと思い、自分のアカデミックアドバイザーに相談しに行きました。しかし、これはシステムだから仕方ないので他の授業を取ってくれとのことと取り合ってもらえず、最後の望みをかけて教授に直接連絡を取り、留学できていて次が自分にとって最後のセメスターであり、どうしても取りたいから単位が出なくても履修させて欲しいとの旨を伝えると、教授の方から学校側へ1席多くしてもらえるように掛け合ってもらえました。ここで一安心かと思いましたが、履修システムを回している人たちの全員がこの特例対応がなされた事実を把握しているわけでないため、いろいろな問題が起きました。紙媒体にサインをする「アナログな」対応であれば起こらないことなのですが、コンピュータシステム上での管理のため、一人多く履修登録されていることがシステムのバグだと勘違いされ、一度登録できていたものがはじかれてしまったり、対応してくれていたスタッフがサンクスギビングの休暇でぱったり連絡が取れなくなったり、休み明けにはすっかり忘れてしまったり。何度も交渉を重ねた結果、希望していたすべての授業は取れませんでした。上記の二つの授業は無事に履修できることになりました。

「Directing」と「Screenwriting」の他には、映画に限らずいろいろなライブパフォーマンスの演出に関係する「Multimedia Design for Live Performance」と、80年代ニューヨーク発祥の「Performance Studies」という社会学系の授業を取るようになりました。両者とも予定にはなかったものの、前者は学んでいる映像技術を映画以外に役立てるために貢献することが予想され、後者は私の千葉大での研究分野に近いため、結果としてはすべて千葉大では学べない、自分

にとって少なくとも今はここでしか学べないものに取り組める機会を得られたなと思い新学期が始まるのが楽しみです。

同時に、このアメリカという地での「交渉」の重要性をよく理解することができる体験となりました。相手を不快にさせない程度に粘り強くこちらの主張をし続けると、理不尽なシステムであっても少しは状況が改善するかもしれないということが実感できました。交渉の余地があるとも見ることができ一方で、黙っていてもそのまま何も変わらないということは、この体験以外でも感じるが多々あります。

2. 生活の状況

秋セメスターの課題をすべて提出し終えた後、こちらでお世話になっている知人と共に、自分にとっては生まれて初めてアメリカ西海岸を訪れることになりました。ニューアーク空港からラスベガスへ飛び、そこから知人の運転するレンタカーでデスバレーを訪れ、ロサンゼルスまで同行し、私は別れてアナハイムの Disneyland Resort でクリスマスをお過ごし、最終目的地のサンフランシスコから再びニューアーク空港へ戻るという約一週間の旅程でした。

しかし、自分が夢にまで見ていたアメリカ西海岸の弾丸ツアーは最初から最後までトラブルの連続で、最終的にはサンフランシスコにて、ニューヨークで秋に購入したばかりの iPhone を盗難されるという波乱の旅となりました。

まず、ラスベガスまでの飛行機は、ニューヨーク周辺の急な悪天候によりフライトスケジュールが乱れ、空港で6時間近く待たされました。これにもかなり意表をつかれましたが、後から振り返るとそれはまだ序の口でした。

夏の極端なまでの暑さで有名なデスバレーには、ムービング・ストーンといい冬の氷の力によって動かされ1年で300~500m 近く自分で「勝手に動いた」ように見える石（図1）を見に行きましたが、その帰りに日が暮れてから Google map に案内された崖沿いの道を進んで行く丘越えルートを通ったところ、気がついたら路面がアイスバーン状態になっており、ハンドルを取られスピンし、危うく車ごと崖から落ちそうになるというトラブルにみまわれました（図2）。なんとか引き返し、続く目的地のロサンゼルスへ到着。

図1 Moving Stone



図2 Death Valley



ロサンゼルスでは Walt Disney Studios（図 3）を門の外から眺め、La La Land（2016）のロケ地巡り（図 4）をし、そこで日本に帰る知人とは別れ、12 月 24 日、25 日をアナハイムの Disneyland Resort（図 5）で過ごしました。

図 3 Walt Disney Animation Studios



図 4 La La Land Filming Locations

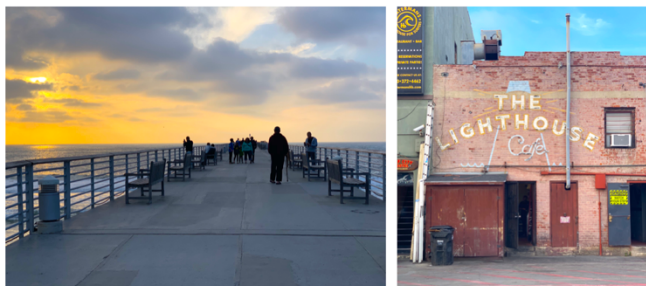


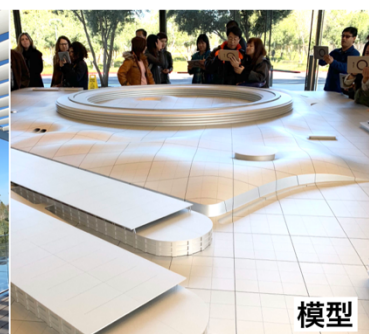
図 5 Disneyland Resort
Pixar Pier



そこから最終目的地のサンフランシスコへ飛び、クパチーノに新しくできた Apple 社の新社屋「Apple Park」（図 6）を訪れこちらも外から眺め、最終日は橋を渡ってエメリーヴィルにある Pixar Animation Studios（図 7）をこれもまた門の外から眺め、Walt Disney Family Museum を見物した後、最後にゴールデンゲートブリッジを見に、往復 3 時間ほどの散歩をしました。

その帰り道、空港に行く前にもう一度食べようと思っていた西海岸名物「In-n-Out Burger」に向かいました。身動きが取れないほど大混雑する店内でなんとかオーダーをして、10 分ほど待ってバーガーを受け取り座ったところ、肩にかけていたハンドバッグの中で充電していた iPhone が消え、充電ケーブルだけがカバンから

図 6 Apple Park



模型

図 7 Pixar Animation Studios



ぶら下がっている状態であることに気づきました。決してバッグを置きっぱなしにしたわけではありましたが、店内の雑踏の中で盗難に遭ってしまったようです。連絡手段がない中、まずは携帯の通信契約を止めようと考え、隣にあった Krispy Kream Doughnuts の Wi-Fi を使い、別に持っていたタブレット端末からウェブにアクセスして通信契約を止め、Apple ID のパスワードを変え、なんとか Uber を呼び警察へ直行（バーガーは食えずじまい）。すでにこの時点で iPhone の位置情報は盗難した人によって OFF にされていたので、端末自体を見つけることは諦めていましたが、Police Report を発行してもらえよう警察署を訪れると、たくさん人が並んでおり、待っている間にいろいろな被害の状況が嫌でも耳に入ってきました。サンフランシスコ入りした前日から昼間でもかなり危なそうな地域が見受けられたため、公共交通機関は全く使わず、すべて Uber を使い用心していたつもりでしたが、空港に向かう直前のバーガーショップでは気を抜いてしまっていたかもしれません。

盗難に遭ったのが Pixar を訪れた最終日だったためバックアップが取れておらず、クラウドに上がっていた数枚以外の写真はすべて手元から失いました。近い将来、それぞれ「門の中」に入る身になってから再び必ず訪れようと思います。

ちなみにサンフランシスコの市街地にはテンダーロイン地区というのがあり、ここは観光地とも接しているのですが、ここの担当の警察官はテンダーロインステーキが食べられるほどにボーンラスが高い（＝それだけ治安が悪い）ということでこのような名前がついているそうです。

生活をしているニューヨークではまだこのような被害にあったことはなく、ましてや日本でも盗難にあったこと自体なかったもので、初めてこのような形で警察にお世話になりました。自分自身の身体に何もなかったことは不幸中の幸いですが、情報の管理や危機対応など様々考えさせられることが多い旅となりました。

まずは無事に新年を迎えられ、新セメスターを始められそうであることを幸せに感じています。また、新たに iPhone を購入する際は必ず「Apple Care+ Theft & Loss」に加入することを強くお勧めします。